

教育部会名：外国語第Ⅱ教育部会

部会長名：上野成利

作成者名：上野成利

## 概要（2 ページ）

### 1. 組織・運営

外国語第Ⅱ教育部会は、選択必修科目である未修外国語（独語・仏語・中国語・ロシア語）の授業を担当する部会だが、選択科目である第三外国語（独語・仏語・韓国語・スペイン語・イタリア語）も本部会に組み入れられている。現在の構成員は人文学研究科・国際文化学研究科・国際コミュニケーションセンターの3部局に所属する教員からなり、2018年3月末現在で構成員の数は29名である。各未修外国語の担当者の内訳は次の通りである。

- ・独語：人文学研究科2名、国際文化学研究科7名、国際コミュニケーションセンター3名（内、特任外国人教員1名）：計12名
- ・仏語：人文学研究科2名、国際文化学研究科5名、国際コミュニケーションセンター2名（内、特任外国人教員1名）：計9名
- ・中国語：人文学研究科1名（特任外国人教員）、国際文化学研究科3名、国際コミュニケーションセンター2名：計6名
- ・ロシア語：国際文化学研究科2名

幹事は4つの言語から1名ずつ選出され、そのうち1人が互選で部会長となり、この4名が「幹事会」を構成している。部会の運営は基本的には幹事会の合議で行われる。本年度についても、入学時の履修言語の選択に導入されることになった「抽選制」をどのように運用すべきかなどの事案について、幹事会で慎重に検討を重ねた。

本部会の提供する授業科目数は総計（セメスター単位）で約350あり、非常勤担当率（独語：4割超、仏語：約5割、中国語：約7割、ロシア語：約5割）が高く、他の部会と比べると、非常勤の任用から様々な連絡などの面で部会にかかる負担がかなり大きい。専任教員と非常勤講師の意見交換や授業における連携を緊密に行う必要もあり、例えばフランス語では授業の打ち合わせや事務連絡を兼ねて非常勤講師との昼食会を行っており、ロシア語でも学期ごとに非常勤を交え、授業の進め方や教科書の利用法についての検討会を開き情報交換を行っている。なお各未修外国語の専任教員グループでは必要に応じて会議を開き、各種の懸案について適宜話し合いの機会を設けている。

### 2. 活動の状況

本部会の提供する授業科目は積み上げ方式になっており、カリキュラムマップが完成されている。なお、本年度を含めて今後数年間は旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行期にあたるが、以下には新カリキュラムの体系を掲げておくことにする。

#### 【初級～中級前期】

- ・1年：前期（初級A1、A2、初級B1、B2）、  
後期（初級A3、A4、初級B3、B4、初級SA3、SA4、初級SB3、SB4）
- ・2年：前期（中級C1、C2）、

#### 【中級後期～上級】＊高度教養科目

- ・2年：後期（外国語セミナーA、B）
- ・3年：前期（外国語セミナーC、D）、後期（外国語セミナーE、F）

各科目の授業目的等については、シラバスに掲載されるとともに『外国語教育ハンドブック』にも明記され、周知が図られている（例えば初級Aクラスでは基礎的な文法事項の習得が目的とされ、初級Bクラスでは総合的実践的な言語運用能力の習得が目指

されている)。また、1年次後期のインテンシブ・クラス (SA・SB) では、日本人教員とネイティブ教員が緊密に連携をとって、高度なコミュニケーション能力の養成が図られている。さらに 2013 年度からの取り組みとして、SA・SB から継続して学べる中級クラス (5 限開講) が設定されている。

一方、2年次には「第三外国語」が選択科目として開講されている (T1・T2・T3・T4)。このうち独語・仏語については 2017 年度より履修者を初級 A クラスに編入する仕組みが新たに導入されたが、開講クラスの枠が増えた結果、履修者数が増加した。「第三外国語」は、意欲的な学生のために複数の外国語の学習に道を開く科目であり、これによって異文化理解の可能性がより広がることが期待されている。

他方、具体的な授業の取り組みとしては、様々な情報機器やインターネット、各種メディアの利用、DVD、CD などの視聴覚教材の活用、対話型学習やペア学習、グループワーク、国際的な学習参照基準の活用、海外協定校とのスカイプ授業、CALL 教室での Moodle の活用など、最新の教授方法に基づく様々な授業の工夫が見られる。また小テストや中間テストで学生の理解度を確認しながら授業を進めるとともに、文化事情を紹介するなど学生の異文化への関心と理解を促す努力を行い、短期語学研修への参加の機会も用意している。さらに近年では授業改善のための FD 活動にも力を入れている。本年度後期には、独仏中露の言語の枠を越えて月 1 回ペースで昼休みに有志で集まり、教授法など FD 全般にかんする情報交換と意見交換に努めた。

### 3. 課題と展望

【1】本部会の抱える大きな問題は、言語別の履修者数が毎年変動することである。従来は、部会内のクラス数の合計を変えずに、履修者数の過去の動向を見て言語間で調整を図ってきたが、それでもなおクラス規模の不均衡は完全には解消されなかった。参考までに過去 6 年間の各言語の選択者数を以下に示しておく。ここにみられるように、年によっては 200 人を超える変動 (複数年単位では 300 人ほどの変動) も生じている。

	独語	仏語	中国語	ロシア語	合計
2012 年度	811	524	1188	109	2632
2013 年度	900	622	963	150	2635
2014 年度	908	756	817	147	2628
2015 年度	809	755	939	141	2645
2016 年度	742	548	1214	143	2647
2017 年度	709	654	1093	165	2621

こうした事情をふまえて 2018 年度より、履修言語の選択について「抽選制」が導入される運びとなった。本部会としても今後「抽選制」の整備に努めていきたい。

【2】「第三外国語」のうち「韓国語・スペイン語・イタリア語」については、大学全体の予算の関係で、2018 年度より当面のあいだ不開講となった。国際人間科学部や文学部等で開講される選択授業で代替することになるが、各学部でばらばらに開講するのではなく、できれば国際教養教育院で体系的なカリキュラムのもとで開講されるのが望ましいと思われる。本部会としても今後の改革の成り行きについて注視したい。

【3】ポイント制の全学的な導入にともない退職教員の後任を補充できないケースが増えており、このままでは部会の運営にも支障を来しかねない。これは〈共通教育への全学出動をどのようにして実現するか〉という懸案と関わる問題でもある。一方、かりに各部局で一定程度の不補充が避けられないとしても、「全学の外国語教育を中心的に担うべき国際コミュニケーションセンターについてはポイント制を適用しない」等の措置も検討されるべきであろう。本部会としても今後、大学当局に善処を求めていきたい。

## 項目・観点ごとの記述

### 基準5 教育内容及び方法

5-1 【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮したものになっている。ほとんどの授業で最新の教科書が使われており、比較文化的な内容や現地の生活などを取り入れて学生の異文化への関心と理解を促す内容のものも多い。また現在のヨーロッパで使用されている「ヨーロッパ言語共通参照枠」といった国際的基準に沿ったテキストを利用したり、またCDやDVDといった各種情報メディアやインターネットなどを通じたアクチュアルなニュースを活用したりする工夫も行なっている。

根拠資料

- ・『外国語教育ハンドブック 2016年度版』
- ・シラバス
- ・教科書
- ・授業中に配布した資料
- ・授業で使用した視聴覚教材
- ・各教員の自己点検・評価報告書

5-2 【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）

初級外国語の授業は基本的には講義形式となるが、一方的に指導するのではなく、各授業の目標とクラスサイズに応じて適切な学習指導法を採用している。例えば、様々な情報機器やインターネット、各種メディアの利用、DVD、CDなどの視聴覚教材の活用、対話型学習やグループワーク、国際的な学習参照基準の活用、海外協定校とのスカイプ授業、CALL教室でのMoodleの活用など、最新の教授法に基づく工夫が見られる。また小テストや中間テストで学生の理解度を確認しながら授業を進めている。

根拠資料

- ・『外国語教育ハンドブック 2016年度版』
- ・シラバス
- ・授業中の配布資料
- ・授業記録
- ・各教員の自己点検・評価報告書

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100字以上）

単位の実質化への配慮がなされているといえる。学期末試験以外に、小テストや中間テストを実施し、理解が不十分なところを学習者に自覚させ、復習を促している。ほぼ毎回課題を出す授業も多い。授業外では留学生等が TA として国際コミュニケーションセンター内のランゲージ・ハブ室に詰め、各言語での会話の実践や各種の質問に応じている。このほか CALL 教室を整備・開放し、外国語教育ソフトを充実させて、学生を自学自習へ導くための課題を学生に課すクラスもある。Moodle を利用して、学生がコンピュータのみならず、スマートフォンや iPhone を使って授業外でも学習できるように工夫している教員もいる。

根拠資料・出席簿（小テストの成績、宿題の提出の有無をも記入）

- ・期末の授業振り返りアンケート
- ・各教員の自己点検・報告書
- ・教科書などの教材
- ・提出課題

5-2-③：適切なシラバスが作成され、活用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

全体として、授業の到達目標、内容、成績の評価方法と基準が明確に伝わるように作成されている。授業のテーマと到達目標、授業の概要と計画については、全クラスの足並みがそろおうよう、部会が責任をもって共通の文章を作成し、個々の担当教員は、成績評価方法・基準とオフィスアワーの情報を個別に記入して、それぞれのクラス特有の情報が学生に正確に伝わるようにしている。また学生へのメッセージとして、各言語を学ぶ意味をコンパクトに伝える努力をすることで、普段はあまりなじみのない第 II 外国語への学習意欲を増大させる工夫をしている。それがある程度成功していることは、学生の授業評価アンケートの結果からも読み取れる。

根拠資料・シラバス

- ・学生の授業振り返りアンケート
- ・各教員の自己点検・報告書

5-2-④：基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

基礎学力不足の学生への配慮等が行なわれている。小テストや提出課題の添削などを行い、その解説を授業中に行なうなどにより、基礎学力不足の学生を生みださないように努力しているクラスも多い。毎回の授業後に提出カード等を用いて、重要ポイントが理解できているかをチェックし、個別の質問に答えている教員も少なくない。各言語とも授業の出席率も高く、合格率も高いと考えられる。また期末試験における受験放棄者は極めて少ない。

根拠資料・出席簿（小テストの成績、宿題の提出の有無をも記入）

- ・期末授業評価アンケート
- ・成績分布表

5-3【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】

5-3-②：成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>成績評価基準はシラバスで明示するか、あるいは最初の授業時間に説明しており、学生に周知されている。またその基準に従って成績評価が適切に実施されている。期末試験、中間テスト、小テスト、授業外での課題の提出、参加・予習・発表状況等を適切な割合に配当し成績評価の基準としている。</p>
<p>根拠資料・シラバス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出席簿（小テストの成績、宿題の提出の有無をも記入）</li> <li>・期末定期試験答案、中間テスト答案、小テスト答案</li> <li>・各教員の自己点検・評価報告書</li> </ul>

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>試験の成績や宿題の提出状況など、主観性の入り込む余地のないものが成績評価の基準となっているため、客観性・厳格性は担保されている。また、一回限りの期末試験で成績評価するのではなく、複数の観点を考慮に入れることによって、学生の能力を総合的に判断する工夫をしている教員も少なくない。</p>
<p>根拠資料・シラバス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出席簿（小テストの成績、宿題の提出の有無をも記入）</li> <li>・期末定期試験答案、中間テスト答案、小テスト・ミニテスト答案</li> <li>・各教員の自己点検・評価報告書</li> </ul>

## 基準6 学習成果

6-1【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>学生の授業評価アンケート（「授業評価」）では、各言語ともほぼ全項目にわたって「中」以上のよい評価を受けている。語彙や文法について、また外国語学習を通して、各言語圏の文化や社会、歴史などに興味を持つようになった学生も多い。ドイツ、オーストリア、フランス、中国などで実施している短期語学研修（夏季語学研修）への参加を希望する学生や個人で外国旅行に行く学生も増えている。さらに交換留学などで長期の留学により一層の専門的な学習をめざす学生も少なくない。</p>
<p>根拠資料・学生の授業振り返りアンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出席簿、答案</li> <li>・各教員の自己点検・報告書</li> <li>・夏季語学研修参加者名簿</li> </ul>

## 基準7 施設・設備及び学生支援

7-1【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

ネイティブの留学生が TA として国際コミュニケーションセンター内のランゲージ・ハブ室に待機し、外国語会話の実践や各種の質問に応じたり、タンデム授業（留学生と日本人学生がペアになり、互いの母語を教え合う）に応じたりしている。タンデム授業の人気は高い。また、CALL 教室の活用を促し、自習を効果的なものにするように工夫している。Moodle が特に効果を上げている。

根拠資料

- ・ハブ室勤務表
- ・各教員の自己点検・報告書
- ・国際コミュニケーションセンターHP（「CALL 室利用者統計」「ハブ室利用者統計」）

## 7-2【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

年度末に担当教員全員が「外国語担当者向けガイダンス」に参加したうえで新年度に臨み、ガイダンスで得た情報をもとに、4月最初の授業のときに学生を対象にオリエンテーションを行っている。学生には『外国語教育ハンドブック』を配布し、外国語授業の目的やカリキュラムなどを十分に周知徹底させることに努めている。

根拠資料・外国語担当者向けガイダンス配布資料

- ・『外国語教育ハンドブック 2016年版』

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。  
また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

各担当教員は授業の前後の時間を利用して学生の質問等に応じるのみならず、シラバス上でオフィスアワーやメールアドレスなどを明示して、学生たちが気軽に、あるいは時間をかけて質問や相談ができるように対応している。また特に CALL 教室での授業で TA を活用し、語学の学習以前にコンピュータ操作にとまどう学生がいらないよう配慮している。また、ネイティブの留学生が TA として国際コミュニケーションセンター内のランゲージ・ハブ室に待機し、各種の質問に応じる体制も作っている。

根拠資料

- ・シラバス
- ・各教員の自己点検・報告書
- ・ハブ室勤務表
- ・国際コミュニケーションセンターHP（「CALL 室利用者統計」「ハブ室利用者統計」）